

蓬茨祖運集下

目次

誕生……	007
娑婆と浄土……	018
教団と果遂の誓……	048
寺院生活の問題点……	070
人間と宗教……	077
鈴木大拙先生 追悼の辞……	084
これからの布教……	091
人間存在と宗教 —— 『観経』序分に登場する人々の教えるもの……	101
釈尊伝をめぐって……	114

政治で神をつくるな	118
憲法と安保と真宗	133
僧伽	149
谷内正順先生 追悼の辞	166
仏法大事	169
同朋	190
自身に展開する仏道——必至滅度の願	214

(口絵 畠山和徳氏蔵色紙)

凡例

一、本書は昭和三十七年から昭和五十四年にかけて教学研究所編『教化研究』、及び『誕生のころ』（二版、昭和五十六年刊）に掲載された蓬茨祖運氏の論考を底本として編集した。

一、漢字は原則として通行の字体にあらため、読みやすさを考慮して、漢字をひらがなに、またひらがなを漢字にするなどした。

一、引用文は、底本引用文を尊重しつつ、旧漢字・旧仮名遣いは通行の字体・仮名遣いにあため、適宜書名を付した。

一、底本中、今日の人権意識に照らして問題と考えられる表現については、適宜改めた。

蓬茨祖運集 下

誕生

加賀の千代女

一一ちいちのはなのなかよりは

三十六百千億の

光明くわうめいてらしてほがらかに

いたらぬところはさらになし

本日の音楽法要のなかでうたわれたこの和讃は、聖人の『浄土和讃じょうどわさん』の一首であります。この和讃に基づくところを申しますと、聖人が一生の間、釈迦如来の金言であると仰いでこられた『大無量寿経だいむりょうじゆきやう』のお言葉の一節からお作りになられたものであります。

三十六百千億という光が、極楽浄土の一つの花のなかから出てくるというのであります。

ところで極楽浄土ということは、現代の人の頭のなかには、はまりかねる言葉でございます

ね。現代人は心を失った人間だといわれております。そのかわり、頭の方がよくなったといわれております。頭はよくなったが、心の方がどうかなってしまっただというような時代でございます。ですから、極楽浄土ということが現代人にわからないのは、頭の大脳の組織にはこの言葉が受け入れられないからでありまして、心の方でないと極楽浄土という言葉はわからないでございます。

で、私が申しあげたいのは、いくらかでもわかりやすいようにということでございますが、心という世界はどんなものか、それにちなみまして、我々人間が、この世に誕生してくるといふ上におきまして、普通考えられる誕生と、さらに誕生にはいろいろな誕生がある。その上でもっとも大切な誕生という意味を、聖人が教えてくださったということをお話し申しあげて、皆さま方に今後のご研究をお願いしたい。こういうわけで、しばらく時間をお願いする次第なのであります。

私は石川県出身ですが、私の故郷に松任まつじょう（現松任市）というところがあります。そこに有名な俳人で千代という名前の人が昔おられました。これは私どもの故郷では松任の千代と申しております。

この人の一番有名な句は、

あさがおや つるべとられて もらいみず

というのであります。

今の人間から申しますと、わけがわからんところがございますね。「あさがおや」はわかるでしょう。「つるべとられて」は何のことかわからんと思います。「つるべ」というのは生まれでこのかた見たこともない。水というものは、水道の栓せんをひねればザーと出てくるものですか、何のことかわからぬ時代になりましたが、昔は井戸というものがありまして、桶おけに竹ざおをつけたもの、これが「つるべ」ですが、これで井戸のなかの水を汲んでいたのです。

ある朝、水を汲みにいきますと、「あさがお」がその「つるべ」に巻きついておりましたので、それを読んだ句が、

あさがおや つるべとられて もらいみず

と。

その「あさがお」を切ってしまうのがかわいそうである。だから隣の家まで、わざわざ水をもたらにいったと、こういう俳句でございます。

「あさがお」がその朝、一輪咲きましたか二輪咲きましたか、ただその小さな一つ二つの花は、その日ちぎってしまっても、また明日咲くのですが、それでもその小さな花を愛しんで、その花の命の短かさ、すぐしおれてしまうような小さな命をかわいく思った。その心をうたったものでございます。

そういう心でないと、極楽浄土というのはわからないのでございます。

俳人千代の誕生

ところが、その松任の千代の俳句が一つだけ私のところにごさいました。それは私がずっと以前に古くなった土蔵を壊したことがございます。すると、土蔵のなかにガラクタがございまして、そのなかから出てきましたのが昔の油皿あぶらひらです。

その小さな楽焼らくやきのようなうすい皿に、千代と書きまして一首の俳句がございました。それは、
ほととぎす きく人の口も とじてけり 千代
と書いてあるんですね。

ほととぎすがいったいどういう声で鳴くのであるかと申しますと、私自身もまだ聞いたことがございません。

ただ人から聞いたところでは「ほんぞんかけたか」と鳴くと、こう聞いたことがございます。「ほんぞんかけたか」というのは、「ご本尊を掛けたか」というのでございますね。

これは、蓮れん如上じょう人のお言葉から出たのではないかと思えますが、「本尊は掛けやぶれ、聖教はよみやぶれ」(『蓮如上れんじょう人御一代記ごいちだいき聞書きんご』六九)という言葉があるんです。どうもそういうところから出たんだと思いますが、ほととぎすはめつたに鳴かないそうです。それも一声しか鳴

かない。そして「ほんぞんかけたか」と鳴く。こういうふう^に聞いたことがございますが、私
は実際に聞いたことがないので、どうもわかりません。

で、めったに鳴かないが一声鳴くと通りすぎてしまう。そういう境地でしょう。

ほととぎす きく人の口も とじてけり

〴〵ほととぎすだつ〴〵という^と、もうみんな一声聞きたさに、耳をかたむけますと、みんな口
をとじるんですね。

まあそういうことで千代の皿があつたんですが、失つてしまつてはもつた^いないと思いまし
て、千代の遺跡があります松任のお寺へさしあげたことがございます。

千代は子どもの時から俳句が好きだつたそうですが、ある時、遠方からわざわざ俳句の宗
匠^{しやう}がやつてきた。で、教えていただきたいと頼みに行つたら、「では〴〵ほととぎす〴〵という題
で一句作ってみよ」といわれた。

それから千代がいくら作つても「だめだ」といわれ、とうとう宗匠はカヤのなかへ入つて寝
てしまった。

千代は一夜、寝ないで考え続けたあげく、夜があけると宗匠が「どうだ、できたか」と聞い
た。その時、スラスラと書いて出した句が、

ほととぎす ほととぎすとして 明けにけり

こういう俳句を作ったのです。

これが千代の誕生でございます。俳人千代の誕生は、この「ほととぎす ほととぎす」とて明けにけり」というこの一句から生まれてきたと、こういえるのです。

ただ誕生と一口に申しますと、この世で我々がお母さんのおなかから生まれてきたことと思えますけれど、それだけが誕生ではない。やはり、我々には誕生ということが何度もある。

何でもない平凡な言葉ですけれども、この一句を作った時、そこに俳人千代の誕生があつて、その誕生は多くの人々に、その後どれだけ多くの喜びと救いを与えたことであろうか。非常に大きな意味の誕生となつたわけでございます。

いそまるの誕生

同じようなことですが、これも私の心に残つた話であります。

山陰地方に「いそまる」という歌の上手な人がいた。この人は、もとは字を一字も知らなかつたというのです。

ある時散歩しておりますと、道を通りかかった飛脚ひきやくが呼びとめたんです。手紙を取りだして、「この家はどこにあるか」と聞きますと、問われないそまるの方は、字が読めませんのでさっぱりわからないのですね。

で、「私は字が読めません」といえばよかつたのに、「そんなやつはおらん」と、こういったのです。ところがそれは、自分のところに行く手紙だったので。それで飛脚は村中さがしまわつたが、ちょうど田植え時でだれもおらなかつた。

仕方なしに庄屋の家へ行きまして、「この家はどこですか」とたずねた。「それはいそまるの家だ、こう曲がつて、そこだ」と教えられて行つてみると、運の悪いことに、ちょうどいそまるは帰つて家のなかにいたんですね。

それだから飛脚、おこるまいことか、「これはおまえのところに来た手紙でないか、こんなやつはおらんとおまえはなぜいうた」、こういうて叱しかられて、さんざん恥かずかしめられたので、それが胸にこたえて、「字を知らんということは、本当に恥かずかしいことだ。今までは百姓するのに字はいらんと思つていたが、恥かずかしいことだ」と、こう思つて、それから庄屋のところへ行き、「どうか私に字を教えてください」と、いろはから習いはじめたというのであります。

ところが庄屋は、「ただ字を習つただけでは覚えが遅いから、一応いろはを覚えたら、うたを作つてみなさい」と、うたの作り方を教えられて、家へ帰つてから、それを作つてやろうと思つて考えておりましたが、なかなかできません。

しかしある時、一首できたのです。

さつそくそれを書いて持っていました。「庄屋さんできました。聞いてください」、「できたか、できたか。読んできかせろ」。しかしできた歌というのが、こういう歌なのです。

蛙かえるめが　ワシの田んぼに　集まって　今日も朝から　やかましく鳴く

こういう歌を作ってきたんですね。

それなら庄屋は、「それじゃどうもいかん。蛙かえるめががの　めめとは何じゃ。春蛙はるがえるとこういうんじゃ。わしの田んぼ　これはいかん。賤せんが裏田に　つどいきて　今日もひねもす　かしましくなく　こういうふうにいわにゃいかん」、こう教えますと、いそまるの方は、何が何やらわけがわからなくなるのです。

そんなふうに着習しているうちに、悲しいことには、その夏、共に働いていたお嫁さんが、急の患いで亡くなってしまった。泣きの涙で葬式をしまして、やがて秋になり、忙しい稲の刈り取り時期になります。

一人で働くのですから、夕方遅くなってやがて家へ帰ってきたら、月が縁側を照らしておりました。

それをながめて、「去年は妻と二人で働いて、あの月をながめていたんだなあ」と、こう思っている、月が涙でくもってきました。

ところがその時、スツと月のおもてをかすめて飛んだ鳥がいるというのですね。それがほと

とぎすだった。この地方ではほととぎすは月の夜に飛ぶ。そしてほととぎすは、冥土めいどからの使
いであるといひ伝えられております。

で、それを見たいそまるは立ちあがって叫びました。

ほととぎす おまえは冥土の 鳥じゃげな ワシがかかさに 会いはせなんだかあ

お嫁さんがどこかで聞いていたら、返事がしたくなつたろうと思います。

さつそく朝になつてそれを書いて、庄屋にもつていくんですね。そうすると庄屋は「心はわ
かる。ほととぎす はよい。おまえは冥土の 鳥じゃげな はいかん」といつてこわしてし
まった、ということではありますが、やがてだんだんと勉強いたしまして、その国一番のうた詠
みの名人になつたということです。

そういう物語を読みまして、私はいまだに心に残っております。三十年も昔に読んだちよつ
とした話ですけれども、心に残っておりますのは、決してそういう成功の話ではなくして、何
でもないなかに、やはり一人の人間の誕生ということが、実に大きく人の心に感動を与え、ま
たその人を生まれ変わらせるという、そうしたはたらきをもっているからだと思ふのです。

誕生のこころ

今、親鸞聖人の教えてくださるところの極楽に往生するという道は、念仏によつて極楽に往

生するほかには何も知らない、たとえ念仏によって地獄に落ちても少しも後悔はないという道でございますね。ただ法然上人の教えによってのみ、私は信じて極楽往生をとげさせていただくのだと、一生の間、この『大無量寿経』の教えを信じて歩まれた、ということをお願いしているでございます。

現代の人間の頭で考えたならば、どうしても受け入れかねることでありましょうけれども、受け入れかねる教えなればこそ、なお私たちは、そのなかに無限の大きな意味というものがおさまっているのである、ということに信じて、そうしてそこから、失っているところの我々の心のなかの響き、心のなかにある「まこと」というものを取りだして、大いなる誕生、ただ世のなかに生まれてきただけではなくして、自分が生まれてきたことが、あらゆる人に大きな喜びを与える意味を持っているということ、聖人は教えてくださったのであると、このようにいただいているのでございます。

そういうわけで、今日の音楽法要にうたわれましたはじめの一首のご和讃をお話の前に申し上げたようなわけでございます。

一 一のはなのなかよりは

三十六百千億の

光明てらしてほがらかに

いたらぬところはさらになし

これは我々一人ひとりに、三十六百千億の光というものが与えられているということでございます。

ただその自覚がないのですね。そう思われたいのです。そして、何も三十六百千億の、そんなたくさんの光をあらわさねばならぬことはないのです。一つで結構なのです。そのうちのたった一つの光をこの人生において見いだすことができたら、三十六百千億の人々に対して大きな喜びを与えていくことになるのでございます。

それこそ私たちが無限に生きていくということになるのではなからうか。このことを聖人は教えてくださったのではあるまいか。

それがまた、「貴賤・緇素を簡ばず、男女・老少を謂わず、造罪の多少を問わず」「教行信証」「信卷」みな平等であるということ、南無阿弥陀仏の六字だけで明らかにしてください。つたのではないだろうか。

こういうふうに私はいただいている次第であります。

(昭和五十六年十月東本願寺出版部発行『誕生のこころ』第二版)

娑婆と浄土

残っていく問題

我々が生まれてきましたこの世、一口には娑婆しやばと名づけるのでありますが、その娑婆という言葉も、どちらかといえば、何の意味であるかわからぬままに使われておりまして、しかも意味のわからぬままに、何かの意味を感じさせるものがありますので、現代で娑婆という言葉がよく出てくるのであります。言葉と申しますものは、時代によって非常に激しく変わるもので、今日の時代になりますと、若い人の話を聞いておりまして、何を話しているのか年の寄られた方はわからんということがございます。そこからラジオを聞きまして、テレビを見るにいても、若い人が喜んで見ていることがどうもわけがわからん。お年寄りの好きなことは若い人にはわからん。そういうようなことも、やはり言葉が変化しているということによるわけがあります。

そういう激しい言葉の流れのなかで、とり残されていまだに使われている古い言葉があるの

でございます。その一つが娑婆という言葉です。この世は耐え忍んでいくべき世界であるという意味を娑婆というのですね。なるほどそういう意味で、娑婆という言葉が生まれてきたと考えると、どうもあまり楽しい時に使われない言葉のようでございます。

そこで娑婆という言葉は、今日の時代にはたまたま使われますが、毎日使われる言葉ではございません。それにも意味がございまして、どちらかと申しますと、現代は耐え忍んでゆくとしようなことはあまり歓迎されぬ時代であります。耐え忍ばなくてよいような方法が歓迎される。その意味で耐えてゆかねばならぬ、忍んでゆかねばならぬということは、おおむね年輩の人が若い人に対していう言葉になっております。聞く方になりますと、それをまともに受けとらないで、どういう言葉が出てくるかという、「わかっている」と。どこかへ行くについても、「気をつけなければいけないぞ」と申しますと、聞いた子どもは、「わかっている」というのが、まず共通の返事です。その意味で、娑婆という言葉のもっております大切な意味は、今日の時代にはなかなか容易に受けとれないということがあるのでございます。

受けとらないからやむをえないというわけにはゆかんでございまして、そこにどういふことが残されるかといえ、むしろそういうている我が身が本当にわかっているのかということでございます。そうしますと、我が身も、平常あまりわかっていることがなかなか実行できないということがございまして、それがつまり「わかっている」という返事に少し関係が出てま

います。子どもに對しましては「氣をつける」といいますが、いう方はそれほど氣をつけているかと申しますと、かえって子どもの方から、「お年寄りが」といわれなくちゃならんよいうなことをやっております。「おじいさん危ないぞ、おばあさん危ないぞ」といわれると、つい「わかつている」ということになりますですね。

こういう話を申しましたのもほかでもございませんので、我々が生まれてきたこの世が、これまた本当に、どういう世界であるかということをおぼろげにわかることができるのか。わからないままに生まれてきたこの世を、我々は日々歩かされているのでなからうか。何と申しましても生まれてきたこの世が、我々にとっては一番の現実でございます。目で見ることもできるし、手で触れることもできるほど、何よりもはっきりしているのでございます。これに對して、生まれぬ先の世界、それから我々がこの世を終わってからの世界は、何としてもわかる道がただ今のところございません。現在のところ、わからねばならぬのはこの世でございます。それがまたわかつて歩けるというわけにもまいりません。わからぬまま歩いてきております。わかろうとして立ちどまろうとしますと、立ちどまるだけのゆとりもない。後ろから押されて前へゆくよくなものです。そういうような状態に我々の今日の姿は動いている。

ここから一つの問題が出てくるのであります。それは、そうしたなかからも、どうしていったらいいのかという問題があるわけでございます。問題がもしもないといたしますと、この世

は平和な世界と申さねばならないのであります。平和な世界と申しますのは、春咲く花もあり、夏咲く花もありますように、自然のままに芽を出し、自然のままに繁しげつて、やがて時が来れば自然のままに葉が落ち、そこには何らもつれが起こらない世界です。人間の世界にだけもつれが起こってきます。

人間には、自然界のおそれと申しまして、人間の方から起こしたわけでない、自然と起こつてくることの地震とか雷というもので代表されるような事柄がございます。これは人間の方で止めることはできません。せいぜいのところ避けるというほかございますまい。雷が落ちるのは止められない。自分の体に落ちないように避けるというようなことしかできません。しかも皆は避けられません。避けられない人も出てきます。そうなりますと、もう無抵抗と申すほかどうすることもできません。それが自然のおそれというものです。それから人間で起こすところのおそれ、人間のしたことが因になってふりかかるところのたくさんの災難がございます。我々はそういうわけで、この一生の間その二つの災難の間を避けて暮らしていくということになります。そして、またそこに問題が残るのでございます。

それはどういうことかと申しますと、なるほど、我々の一生はそういう災難には遭あわなかつた。一応めでたく人生の航路というものをここまで歩んでくることのできた。さてそれからどうするのか。こうなりますと、後は死ぬよりほかに仕方がない。こういう問題がやはり後に残

ってきます。今人生の老後をこうして送っているが、さて後は死ぬばかりであるということになるわけでございます。

ここにも一つ問題がございますね。最後に、死ぬことがあるということは、はなはだこれは困ったようでありますけれど、もしこれがなかつたらなお困る。やはり、死ぬこともこれ大仕事ですよ。まだ死ぬという大仕事が残っていると思えば、気も朗はげらかになるということもございます。死ななければならんと思うから困る。まだ一つ仕事が残っているのです。その時にどういうふうに死んでゆくのが一番よいのか。これまた、そうなると死にざまということが問題になります。平凡に死ぬのが一番よろしうございますが、しかしどうも亡くなる姿を見ておりますと、あまり美しい姿ではめつたに死ねません。何かしらん、地獄へ落ちてゆくようなふうになって死ぬのが多うございます。地獄があるかないか一応別にしましてね。

私もはよく臨終に立ち会うことがございますが、やはりその時には、意識がもうろうとなりまして、出る息、入る息がいかにも苦しそうです。早く楽になった方がよいのではなからうかというふうに死んでゆかなければなりません。

それは仕方がないといってしまうえばそれまでですが、ただ我々の人生は、「わかっている」ということから出発しまして、そしてわからんことに悩まされて、最後にはわからんままに終わっていくと、こういうわかれても返事のしようがないものでございましょうね。こういうことも

こういう場なればこそ、こんな話をしてもおとなしく聞いてくださいますが、普通のところでお話しますと、たいていはあっち向いていつてしまします。けれども、たとえ顔をそむけてもそうでないといえないのです。事実はそのほかにないのです。ただ、それだけが人生なら何もございません。それだけが人生なら、こんな話をする必要はないのです。けれども、こういう事実があることをだれも否定はできないのです。その否定ができないということから、何が我々に教えられるのかということが一つございます。

苦しむ力が我々を生かす力になる

その意味から、我々の人生はきれいなよいところをながめ、そして災難のない苦しみのないところを選んで歩きたいと望む人生となるのでございます。せめて上面だけでも、そういう姿をして通したい。妙なものです。我々の姿は一つであるにいたしましても、やはり外へ出る時には、女の人でしたら、頭の一つもなでられるでしょう。男の方は、頭の毛があれば、クシの一つも入れられるでしょうし、髪の毛のない人は——これはしょうがありませんが、それでも自分の洋服でもきちつといたしますか、何かやるんですね。私もここへきます前にちよつとやってきました（笑）。おかしいものです。自分で見るのでもなしね。私、妻とケンカしたのはいつもそれです。出ていこうとしますと、その姿では困るから着物に着がえていつてくれと

か、髪を刈れとか——頭のことは今でも会うたびにいわれますが。私は、「自分に見えないから、どうでもよい」というんです。そうすると、「自分には見えなくても人の目に見える」というんです。「それはお気の毒なことじゃ」というんですが（笑）。そうしますと、妻がいうんですね。「あなたが悪くいわれると、何と気のつかん奥さんだろうと、私の恥になるから、やはり身なりは装えていってもらわぬと困る」というんです。そういわれると、いつも世話になっておりますからね（笑）。やむをえず、それじゃ、まあおまえのために頭を刈ってゆこうかと（笑）。そういうことが、私たちの生活のなかに大事なことのひとつになっている。そして、そのためにかえって我が身ということの苦しみを、それだけ余分にもたねばならない。こういうことになりませぬ。

その苦しんでいる心は、ただ苦しんでいるというだけではないのです。つらいだけではございません。苦しんだり、つらがつたりしている人の顔は、決して美しい顔ではございません。みにくい顔になっております。非常にみにくいものが、私たちの心の姿になって動いてくるということがございますね。そこから、大ざっぱに申しますと、我々がこれまで通ってきた人生、これからも通らねばならない人生、三十から四十代になりますと、だいたいの人生を通じてきたということになる。それで後の方はだいたい察さすることができんです。もう後は、生きていれば生きていくほど、楽になるということはめったにない。楽になるかどうかと思う

ていた時代もございましたが、楽になれることがもうない。今日の時代はなおさらです。

一昔前は、やはり年をとったら楽になるだろうという希望がございました。今日の時代では、年をとったら、楽になるだろうということは感じられないのでございます。せいぜいのところが、社会保障でも十分できて、養老施設の立派なものでもできるだろうというのが精一杯の望みでございます。けれども、それができなくても、私は行きたくないのです。どんな立派な養老施設ができません、やはり行くと、家に帰りたくなくなります。そうしますと、どうせ楽になるということはないのです。

否いなでも応こたでも、私たちの人生は、事実としては苦しみ多い世界に生まれてきたということを確認ねばならない。しかし、これを確認するには相当勇気がいるのです。これを確認ということは、我々の力ではなかなか認められません。それを普通はあきらめるといっております。あきらめるといっているのは、あれはあきらめられないということをだいたい知っているのです。あきらめられることであつたなら、そんななさけない顔をしないでよいのです。どうしてもあきらめられないのです。

で、そのあきらめられないということは、我々は自分の力では、苦しみの世界であるということをはなかなかに容易に認めることができないということです。それが本当に、なるほど苦しみの世界であると認めることができた時には、その苦しみというものは、これはもはや私を苦し

めるといふよりも、私を生かす力になる。こういう意味が含まれているということが人生の意義になるのでございます。それが娑婆という言葉の意味なのです。苦しみというものは変わらなくても、その苦しみというものの受けとり方を変えてゆく。そうして苦しみが苦しみでない、むしろ本当の楽というのは、この苦しみというものなかりせば、自分には知ることができなかつたという、こういう道が、我々の人生の意義であるということ、これをわからせてくださる道こそは、我々がこの世に生まれてきて、たまたまにして耳にしますところの娑婆という言葉の意味でございます。

その時の娑婆ということは、仏の教えによつて、我々はこの世をこの世として本当に認めることができる。そして、仏によつて与えられた力によつて、我々はこの世を超えた広やかな世界というものを我が身の未来として抱きとることができる。こういうことを、この世に生まれてきていただくためには、我々は、はかりしれぬ不可思議の因縁というものが、我が身に与えられているということをまた知らなければならぬのでございます。そしてまた、この世に生きてきたということは、ただ生まれてきたのではなく、むしろ、我々というものは、自分というものを見失つて、いつも自分の周囲のものにあやつられながら、いかにもてあそばれて生きているものであるかということを自然と教えてくれるものがあるわけです。

それで、自分の周囲をよくして、立派な社会にして、そしてすべての人が楽な生活ができる

ようにしようというような心も出てきませんし、また反面に、楽な世界が出てくれば、また楽な世界のためにもあそばされて、やはり苦しむよりほかにないということも出てきます。このどちらへ入るかといいますと、我々は後の方へ入るんです。これを凡夫というのでございます。

我々は凡夫という言葉をめったに使いませんが、出た時には、あまりよい場合には使いません。例えば子どもが台所にも行って、そこにあつた品でもひっくり返したりしました時、子どもでもそうしたことをしますと、「そそっかしい、気をつけて歩かないといかん。またひっくり返した」と、親は叱しかるんです。けれども皆さん方、自分がたまたまそういうことをしますと、「こら、なぜ気をつけて歩かんか」と、そんなことはいわないです。どういふかといいますと、「凡夫だから仕方がない」と、そういうのです。我が身のことは凡夫、子どものことになると凡夫でなくなってしまう。こういうようなことで凡夫という言葉は使われておりますね。

けれども、凡夫という意味は、環境のために支配されているものということです。これが凡夫です。自分の周囲に支配されて生きているということが凡夫です。それが子どもを叱る時にはそうでなくなっているのです。環境を支配しているという立場に立っておりますから、それで遠慮なく叱ることができるのです。子どもは環境に支配されるものであるから凡夫であると、そうわかれば自分も凡夫であるとなづけけるのですけれどね。そうでなくて、自分は環境を支

配しているという立場にいるものですから、それで凡夫を認めることができない。たまたま我が身が環境に支配されているという立場になると、凡夫だからといって我が身を保つという、こういう意味でいたい凡夫という言葉は使われております。

使う言葉が間違いなのはございません。本当にその言葉が使われたら、なるほど自分にははかれこれいうけれども、やはり環境に支配されて、そうして環境をどうかするという力は持っていないものだなということがわかれば、何も「凡夫だから仕方がない」ということはいう必要はございませんね。「あいすみませんでした」ですむのです。

何かそういうごくごく平凡なところに、非常に大事な、非常に深い意味がある。それがもしも自分にわかったならば、ものを見る見方が変わってくる。見方が変わるのでなく、自分を取りまいてる周囲までが変わって見えてくるのでございます。

それで我々の人生には、これをよく学んで、そして、それをよく知ることによって、この人生の値打ちを、どこまでもどこまでも極限にまでくみとっていくことができる。そこから、我々の最後の死という問題も、かえって大きな極限の意義を持つてくる。生のみが意義をもっているのではなく、最後に至るところの死にまでも、我々にとっては広大な意義を持つているということ、これを知ることのできる道こそは仏の教えであり、仏の教えによって知ったという立場でなければ、我が力にならないということがございます。